

# 「ダイナーシング 10年のあゆみ」

発行所 公益社団法人岡山県看護協会  
岡山ダイナーシング看護協会  
〒703-8251 岡山市中区竹田 155-7  
TEL (086) 901-1373  
発行責任者 宮田 明美

平成 29 年 8 月 31 日 発行

## 岡山ダイナーシング看護協会 10周年にあたって



公益社団法人岡山県看護協会  
会長 宮田明美

立秋とは名ばかりの暑い日々が続いており、また、今年は熊本大震災の爪痕が残るなか、九州北部が再び記録的豪雨に見舞われ、多数の死者、行方不明者を出しています。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りすると共に、一日も早いこの異常気象の終息と被災された方々が元気を取り戻されることを願うばかりです。皆様におかれましては、この時期の体調管理に気をつかわれながらお過ごしのことと拝察致しております。

公益社団法人岡山県看護協会では、岡山訪問看護ステーション看護協会、居宅介護支援センター看護協会に続き、平成 19 年に療養通所介護事業所「岡山ダイナーシング看護協会」を開設し、今年の一つの節目となる 10 年目を迎えることができました。

岡山県では最初の開設ということもあり、先例のない中、暗中模索しながらのスタートでしたが、皆様方やご家族、先生方、関係する多くの方々からお寄せ頂きましたご意見やご感想、叱咤激励等々により「支えられ育てて頂き、ここまでくることができた」との思いで一杯でございます。心から感謝申し上げます。

世界に類のないスピードで進むわが国の超高齢社会、ターニングポイントとされる 2025 年まで後 8 年と迫りました。「病院から在宅へ、ケアからケアへ」と転換が図られ、地域包括ケアシステムの構築が急ピッチで進む中において療養通所介護は、中重度の医療ニーズと介護ニーズを併せ持つ方への通所サービスとして、今後、更に重要性が増すものと思えます。

看護協会としまして、皆様に住み慣れたわが家で、安心して暮らし続けて頂くために、今後とも、地域の先生方や関係する方々との連携を密にすると共に、療養通所介護、訪問看護、居宅介護支援の 3 部門が連携をとりながら、サービス内容の充実と看護の質の向上に向けて努力してまいり所存でございます。

今後とも、忌憚のないご意見、ご指導を宜しくお願い申し上げます。



# 療養通所介護

## 「岡山デイナーシング」



2007



4月  
開設

2009



5月  
「一日訪問看護ステーション所長」  
看護の日のイベント



12月  
広報誌『やまぼうし』発行開始

2011



7月  
昇降シート車3台導入  
据置き式天井走行リフト設置

『療養通所介護』は、医療ニーズが高く、より多くの介護が必要な中重度の方を対象とした介護保険を使って受けられる「通所介護」サービスの一つです。2006年に制度化されました。



### 10年間継続利用の表彰者



デイに通うことで声をかけてもらい、いい刺激になってここまでこれたと思います。



# 看護協会」 10年の軌跡

2012 10月  
中四国ブロック療養通所介護推進ネットワーク研修会にて活動報告

2013 9月  
中四国ブロック療養通所介護推進ネットワーク研修会 開催 in 岡山

2014 9月  
ナノミストバス導入

2015 7月  
季刊誌『たけだより』発行開始  
リフト車4台目導入

2017 3月  
増築



ご主人が奥さんの頭をポンポンと撫で「また、がんばろうなあ」と声をかけられました。



何でも話せます。頼りにしています。安心して任せられます。





# 10年間の利用者の状況

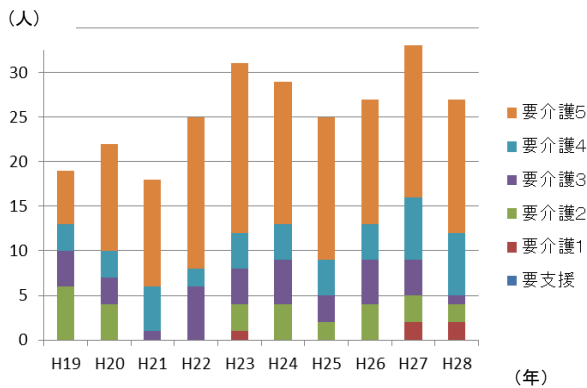


図1 利用者数の年次推移

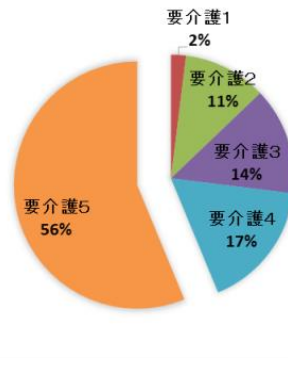


図2 要介護度の状況

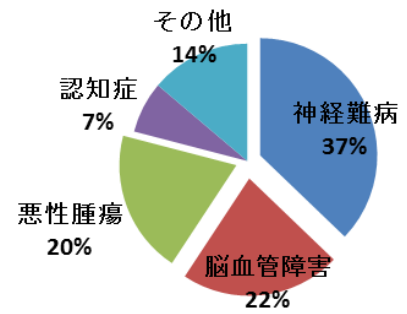


図3 疾患の種類

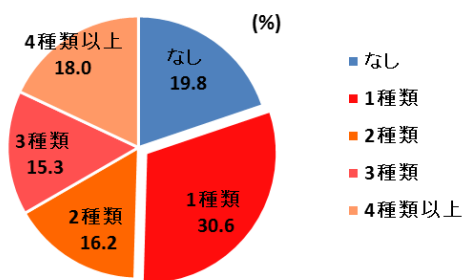


図4 利用者の医療処置の状況

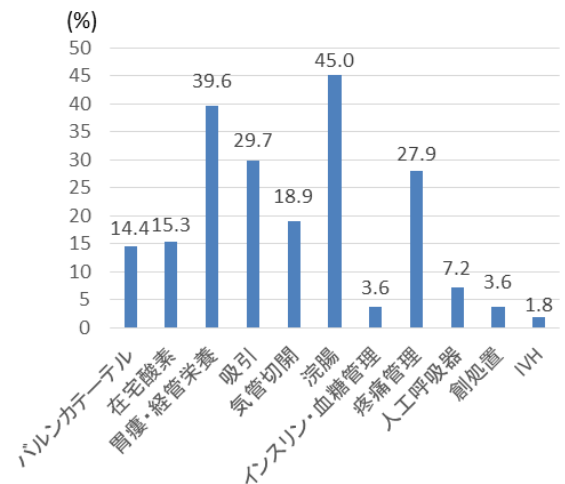


図5 医療処置の種類

開設した2007年から10年間の利用者の詳細を図1～5にまとめました。

まず、10年間の利用者数の年次推移は図1のとおりです。利用者の人数に大きな変化は見られません。このうち、3人の方は10年間継続して利用されています。(前頁の表彰者)

また、利用者全体の要介護度を比較すると、図2に示すように、要介護5の利用者が56%を占め要介護3以上は87%でした。

図3は、利用者の疾患別割合を示しています。神経難病、脳血管障害、悪性腫瘍が79%を占めていました。

図4は、利用者の医療処置の状況を示しています。80%の方が何らかの医療処置が必要な状態でした。図5は、医療処置の種類別に示しています。胃瘻・経腸栄養、浣腸、吸引といった医療処置が多くみられました。また、人工呼吸器を装着している方も全体の7.2%でした。

これらのことから、医療ニーズと介護ニーズを併せもつ在宅の中重度の要介護者の方々を支援するという事業所の担う役割を果たしているといえます。また、医療依存度の高い利用者が多いことから、知識と技術を兼ね備えたケアが必要であるといえます。



医療依存度の高い利用者の方々は、外出の機会が少なく限られたスペースや人との交流になりがちです。療養通所を利用することで、送迎をはじめ食事や入浴、レクリエーションをとおして、自宅ではできないことや難しいことを体験していただいています。

春には、一昨年よりご家族もお誘いし、一緒に出掛ける機会を作りました。夏には、季節の果物や野菜を食べていただき、湯船にミントの葉を入れて香りを楽しんでもらったり、汗ばむ季節にさっぱりと爽快感を味わってもらいます。食欲の秋には“美味しいものは別腹”と、一緒におやつを作ったりします。クリスマスツリーを一緒に飾りつけをすると華やかな雰囲気になりそろそろ1年の終わりを感じます。

節分には、真剣に鬼に豆をぶつけ1年の厄払いをします。このように1年をとおして、四季を感じて頂き、たとえ重度の方でもより豊かな日常生活を送ることができるよう心がけています。



# 岡山デイナースィング看護協会 10周年をお祝いして

西条脳神経外科クリニック  
院長 西条 寿一



岡山デイナースィング看護協会が、当院より歩いて60歩の場所にオープンしたのは、当院が開院してから1年目のことでした。そのころの西川原・竹田は、水田、ほうれん草畑、ナス畑があちこちにあり、のどかさの残る地域でした。それから10年気が付くと、婦人科、脳外科に続き、循環器科、皮膚科、泌尿器科、歯科が出来、妊娠から介護まで診れる医療地域に変化してしまいました。本当にあっという間の10年間でした。

脳神経疾患は、今の医療ではどうしてもならない疾患が多くあり「どんなに頑張っても治らない」ことを実感しております。そこで、重要なのが「予防」と「後遺症の残った患者様を手厚く見る」ことです。当院は「予防」を選んだわけですが、岡山デイナースィング看護協会は「手厚く見る」ことを担っており、脳神経外科の医療には欠かせない存在と考えます。

しかし、長年介護への関心は低く、やっと2000年介護保険が導入され、徐々に訪問看護、在宅看護、通所介護に目が向くようになり、そんな中で岡山デイナースィング看護協会は先駆けて、2007年オープンし10年間最先端の介護を提供してきたように感じております。

当院とデイナースィングが地域的に近いので少しだけお手伝いをさせていただいておりますが、看護師さんたちの的確な患者様やご家族への対応、さらに医療への要求ができており、介護の必要となった患者の診療を日々助けてもらっています。今後さらに協力のもと医療介護を進めていきたいと考えております。

益々の発展を、お祈りしております。



## 日頃の感謝をこめて



ひかり薬局介護相談事務所  
吉留 陽子

私がA様に出会ったのはH21年3月。A様は細菌性髄膜炎を発症しその後多発性脳梗塞を起こされ気管切開をされていました。

当時、気管切開された方を担当する事が初めてで、分からない事も沢山ありました。退院前から奥様と一緒に考え、準備を進めている時に看護協会様とのご縁を頂き、遠方ではありましたが、訪問看護やデイナースィングの利用をさせて頂ける事となりました。気管切開をされる以前でも、通所やショートステイの受け入れ先がなかなか見つからなかったそうです。デイナースィングを利用出来た事は奥様にとって、気持ちや時間的なゆとりが持てるようになりました。

また、サービスの受け入れだけではなく色々な助言を頂く事もできました。当時、痰吸引も頻回で痰が嘔き出る状況でしたが、低圧持続吸引器を薦めて下さったことで吸痰回数も激減しA様と奥様はとても穏やかに過ごす事が出来るようになりました。看護協会様にお世話になり今年で9年目を迎えます。その間入院等のアクシデントもありましたが、また元気に戻って来られ、訪問看護を始め様々な支援を受けながら奥様と自宅で生活する事が出来ています。経験豊かな看護師さんがおられ、A様はもちろん奥様にも配慮して下さいご支援頂けることがとても心強くそしてお二人の生活を支えていける大きな力となっています。デイナースィングの暖かい穏やかな雰囲気のようにA様を始め、多くのご利用者様にお力添えを頂きますよう、今後共どうぞ宜しくお願い申し上げます。





## 療養通所介護を利用して

江森内科・循環器科  
院長 江森 哲郎

大正12年生まれ（92歳）の男性Tさんの娘さんから慌てた様子で電話があったのは、平成28年2月初旬のことでした。Tさんは、高血圧、糖尿病の治療歴が長く、多発性ラクナ梗塞による認知機能の低下がありました。往診にうかがったところ肺炎のために衰弱していることが判明。週末のため抗生剤の点滴静注を自宅で2日間行い、月曜日入院を手配しました。担当医としては、入院させていただいた病院に感謝し胸を撫で下ろしていたところ、にわかには信じられない連絡が入りました。ぐったりしていたTさんが、入院するやいなやせん妄状態になり、点滴は引き抜く、ベッドの柵を投げるなどの大暴れ、一晩だけの入院で退院になってしまったのです。

在宅医療で対応する以外に選択肢はないという現実直面して娘夫婦の不安は大きく、起居、排泄、食事のすべてに介助が必要となったTさんをどのように世話したらよいか戸惑っておられました。このような状況では、医師が行う、病状や予想される経過の説明は不安の解消になんら役立ちません。ここが、在宅医療の最初の関門です。

Tさんの病状は訪問看護の導入とともに集中的な抗生剤の投与で一時的に回復しましたが、その後、周期的に発熱を繰り返し徐々に衰弱が進んでいました。長期の在宅医療の問題点として、世話をされる家族の身体的、心理的負担があります。Tさんの娘夫婦は専業農家で稲作とブドウ栽培をされており夏が近づくにつれて忙しくなります。そのような状況で訪問看護からの勧めで療養通所介護（デイナーシング）を導入していただきました。丁寧な対応による食事や入浴、おむつの交換などの種々のケアの実践を通して患者と家族の不安が和らいでいく様子を実感しました。病状が重く、通常の通所介護（デイサービス）では対応できないTさんの場合、自宅を離れても手厚いケアを受けられることは本人だけでなく家族にとって本当に有り難いことでした。半年間にわたる療養通所介護と訪問看護の関わりの中で自宅での看取りが自然に受け容れられ8月初旬にTさんは亡くなりました。

在宅医療において患者の症状の緩和、患者および家族の心の安らぎは“診る”ことよりも“看る”ことによってもたらされることを深く知りました。ありがとうございました。岡山デイナーシング看護協会、訪問看護ステーションの益々のご発展をお祈り申し上げます。



## 安全・サービス提供管理委員会に参加して

在宅介護支援センター旭川荘

田中 明子



岡山デイナースィング看護協会が開設され、10年の節目をお迎えになり、誠にありがとうございます。ご依頼を受けて、長く安全・サービス提供管理委員会に参加させていただき、取り組みのご報告をお聞きしてきましたので、感慨深いです。

安全・サービス提供管理委員会では、利用状況として要介護度や疾患、利用の期間、利用者数と利用回数、利用者の様子、季節行事などの活動報告、ヒヤリハットなどの報告をお聞きしています。神経難病や癌末期の方など、多くのケアを必要とする利用者に対し、看護の視点で、最後までその方らしく生きることができるよう、取り組まれています。

印象に残っている事のひとつでは、癌末期の方の焼肉を食べたいという希望をかなえるため、皆さんで準備して療養通所のウッドデッキで、バーベキューを実現され、とても喜んでいただいた報告です。思わず一緒に喜びたいエピソードでした。

ヒヤリハットや利用者満足度アンケートについても、毎回、真摯に振り返り対応されています。

これからは地域密着型サービスとして、地域の方々とのつながりが大切となります。

前回、安全・サービス提供管理委員会に参加の後に、第1回の運営推進会議がありましたが、民生委員や愛育委員、家族や地域のケアマネジャーなど多くの参加があり、今までの基盤があるからこそと感じました。

先日、私がケアマネジャーとして、担当させていただいている神経難病の方の奥様から、今のデイサービスに行けなくなったらどうしようと不安そうに聞かれた時に、「お迎えの時から看護師さんが身体の状態を看てくれて、通えるデイサービスがあるんですよ」とお話しすると「じゃあ大丈夫ね」と笑顔になりました。

療養通所は、訪問看護と連携して、利用者や家族の大きな安心につながる、無くてはならない支援です。今後も、心からご活躍をお祈りしています。



## 10周年に寄せて思うこと

岡山居宅介護支援センター看護協会

所長 竹内 恵

『通所看護』と仮称していた『療養通所介護』は平成19年4月から始まりました。従来の通所サービスでは対応の難しかった、医療的ケアを要し常に看護師により観察が必要な方を対象とし、訪問看護と協働しています。自宅で訪問看護師が、通所で長時間看護師等が関わることにより、ケアの幅も広がり、また介護するご家族のレスパイトにもつながっています。振り返ると、開設の準備段階から、期待と不安が半々だったように思います。ケアマネジャーとしては「今までできなかったことができる！」という思いと、併設事業所の職員としては、「今日も一日トラブルなく過ごせますように」と祈るような気持ちで関わっていました。今では介護職員も増え、看護師と連携して、利用者一人ひとりにあわせたケアを展開しているのを安心した思いで見守っています。ケアマネジャーとしては、多少の無理も聞いてもらえる心強い存在であり、対応の難しい利用者の方でも安心してお願いしています。また他事業所のケアマネジャーや病院・かかりつけ医からの問い合わせも増えてきていることから、地域において周知されてきていることを感じます。

今後も、他の通所サービスにはない独自性を発揮し、利用者・ご家族のよりよい療養生活を支える事業所であり続けることを期待しています。





## ともに 10 周年を迎えた喜び

岡山訪問看護ステーション看護協会  
訪問看護師 杉本珠美

訪問看護ステーションが現在の事務所に移転し、同時に岡山ダイナースィング看護協会が始まって、早 10 年になります。訪問看護と療養通所介護が連携することでよりよいサービスの提供ができることをめざしてきました。訪問看護だけでは時間に限りがありできないことも療養通所介護で実践でき、その後の訪問看護にも役立てています。訪問看護と療養通所介護が協働することにより、密に情報共有ができ「安心して任せられる」と言う声も聞きます。通所サービスを利用するのに抵抗感がある方でも、訪問看護師が送迎時に手伝ったり、通所の利用中に声をかけることで、安心して療養通所介護を利用でき、ひいては他の通所サービスの利用につながったこともありました。

岡山ダイナースィング看護協会の利用者は重度で医療の必要性の高い方が多いので、このように連携することにより、在宅療養をささえることができていると感じています。利用者ご本人はもちろんですが、そのご家族が疲弊されている時や緊急事態等で介護が難しい時など、介護の負担の軽減につながったこともあります。

思い返せば事業所名を決めるのに、皆で頭を悩ましていたところ、「通所で看護を提供するならダイナースィング！」と思いつきで放った私の言葉から『岡山ダイナースィング看護協会』になりました。キャッチフレーズの『わが家で暮らし続けるために』は、訪問看護をしてきた思いの中から自然と出てきた言葉でした。そうしてともに 10 年を歩めたことも大きな喜びです。今後もそれぞれの強みを活かして、訪問看護と療養通所介護が連携し住み慣れた家での療養生活を支えていきたいと思ひます。お互いに切磋琢磨して頑張りたひと思ひます。



## 10 周年を迎えて



岡山ダイナースィング看護協会  
主任看護師 石原 美代子

療養通所介護事業所「岡山ダイナースィング看護協会」を開設して 10 周年を迎えることができました。『療養通所介護』の対象者は、難病やがん末期の方、気管切開や吸引が必要な方など医療ニーズの高い要介護者で、常に看護師による観察が必要な方です。そして、居宅介護支援事業所、訪問看護と協働して専門的なケアを提供する通所サービスです。

10 年前、試行錯誤で始まった日々、送迎ではどの道を通れば負担がないか、“安心・安全”にと運転した事を思い出します。10 年という月日は短いようで長くもあり沢山の出会いや別れもありました。出会った方々お一人おひとりにあった療養、その方のペースに合わせたケアを大切にしてきました。ある時は、「こんな体では焼肉屋さんにも入れない、もう一度炭で焼いたお肉が食べたい。」と、がん末期の方との会話の中から思いを知ることがありました。なんとか願いを叶えたいと職員で考え、ささやかではありましたが昼食に炭で焼いたお肉を口にして頂け「おいしい！」と笑顔が見られ、その方の思いを叶える事ができました。主治医、ケアマネジャー、訪問看護との連携のもと計画、実行することができました。

「病院から在宅へ」という流れの中で、医療の必要性の高い方が在宅で生活を送るようになり、医療・介護をあわせもつ療養通所介護の担う役割は大きくなると思われまひます。一人ひとりの思いを大切に、安心して療養生活が出来るように応援したいと思ひます。当事業所を利用して「よかった！」と思っただけけるように職員一同頑張りていきたいと思っただけまひます。必要とされる岡山ダイナースィング看護協会でありたいと思っただけまひます。



## 皆さんと楽しめるレクリエーション

岡山ダイナーシング看護協会  
介護福祉士 上原 小百合

岡山ダイナーシング看護協会では、季節ごとに利用者様と一緒に壁画を作っています。重度の方も利用されているので、手作業ができる方、できない方と様々な方がいらっしゃいます。手作業ができる方といっても日々の体調もあり、体調良く始めても途中で中断になる事も多々ありますが、無理なくできる時に出来る事をしてもらうように心掛けています。また、手作業が難しい方は、目で出来上がりの作品を見てもらい、耳から「今日は〇〇を作りました」「今日は〇〇の日ですよ」などと視覚聴覚で季節を感じてもらおうようにしています。

利用者様の中には目で合図（まばたき）をしてくれたり笑ってくれたり。時には「良いものができたな」「可愛いが」と笑顔で言って下さったり。「もうすぐ、おひなさんなんじゃなあ・・・」など、作品を作ることによって季節の話題も広がります。一緒に作品が作れなくても、季節を一緒に感じ合えることが職員として嬉しいです。

残存能力を引きだし少しでも活動的になるように、その方の得意とするものや好きなことをきき、難しくなく簡単な作業で、そして楽しめるような作品づくりをめざしています。これからも無理なく皆さんと楽しめるレクリエーションができるように日々努力していきたいと思っています



## 住み慣れた家で最期まで暮らしたYさん

岡山ダイナーシング看護協会  
看護師 難波 文

進行性の神経難病を患っていたYさんは、歩行が困難になり車椅子主体の生活になったころから当事業所を利用されました。のちに人工呼吸器装着となりましたが、Yさんはいつも穏やかな表情をされており、またご家族もそんなYさんを暖かく見守り献身的に介護されていました。

病状が進行し急変も考えられる状態になりましたが、ご家族は「最期まで家で過ごしたい」という強い思いを持っておられました。その思いを支えられるよう、何度か関係者間で話し合いながら、継続してサービスが提供できるように考えました。主治医、訪問看護、療養通所介護、福祉用具事業所、ケアマネジャーと情報交換は密に行われ、その都度状況に合わせた対応をしてきました。結果、Yさんは亡くなる前日まで療養通所介護を利用されました。通所から帰宅後、深夜に急変して亡くなられたのですが、私たちは、前日まで療養通所介護に来られたことが良かったのかどうか気になっていました。後日、慰問させて頂いたときに「デイに来ていただけて私達は嬉しかったのですが、来て頂いたことが本当に良かったのかどうかと思っています。」と話したところ、ご家族は「今までお世話になった皆さんに挨拶に行ったんよ。だから大丈夫。今まで本当にありがとうね。」と言ってくれました。この言葉を貰い私こそYさんとご家族に感謝の気持ちでいっぱいになりました。

これからも様々な他職種の方々と連携して「住み慣れた我が家でずっと暮らしたい」と思っておられる利用者・ご家族の助けになれるよう日々努力して参りたいと思います。



## 安心して過ごしていただくために

岡山ダイナーシング看護協会  
介護福祉士 浅野 奈保美

Aさんはご主人との二人暮らしの70歳代の女性です。デイサービスと訪問看護を利用されていましたが、加齢と病状の進行から体調管理が難しくなり、今まで利用されていたデイサービスから療養通所介護に変わってこられました。体調も悪く、認知症の進行もあり、表情が硬く、何事にも拒否的で血圧などの薬も飲めなくなっていました。

初めは慣れていただけるように、訪問看護と協力して迎えに行くうちに、迎えに行くと玄関先で待っていただけるようになりました。療養通所介護利用中も頭痛や寒さの訴えが多く不機嫌になっておられました。Aさんの訴えをしっかりと聴き、頭を冷やしたり、前もって湯たんぽでベッドを温めるなど快適に過ごしていただけるよう心がけました。一番拒否の強かった入浴では、浴室をしっかりと温め、Aさんの好きな話題や雑談を交えながら入っていただくことで「気持ちよかった」と笑顔で答えてくれるようになりました。また、食事や水分摂取、清潔、服薬を整えることで、また、利用中に定期便でかかってくる息子さんとの電話（高度の難聴のため自宅では電話のベルに気が付かない）で会話を楽しむことで、少しずつ表情も穏やかになり、レクリエーションに参加する時間も増え、活動的になりました。安心して気持ちよく過ごしていただくことでAさんとの距離が近づきました。また、それまで、関心のなかったご主人にも顔を覚えていただき、玄関まで見送りに出て来られたり、「妻が起きてこない」と声をかけてくださるなど協力的になりました。回数を重ねることで今まで分かりにくかった家での様子が少しずつ見えてきました。気になることを息子さん、主治医、ケアマネジャー、訪問看護師、訪問介護のスタッフで情報共有し、周囲のサポート体制を整えることで、切れ目のないサービスにつながっていくことができたと思います。

数ヶ月後には病状が進み食事量も減り、一人で歩くことが難しくなりましたが、亡くなられる1週間前まで休むことなく通って来られました。迎えに行くと「ありがとう」と何度も言われながら車に乗り込む姿が今でも思い出されます。

Aさんとの関わりをとおして、安心して気持ちよく過ごしていただくことから見えてきた思いや信頼関係、そして多職種との連携により難しいと思われた在宅生活の支援の方法を学ばせていただきました。

今後もこの経験を活かしケアを続けていきたいと思っています。





## 10年を振り返りこれからに向けて

岡山ダイナーシング看護協会  
所長 菅崎 仁美

この度は、岡山ダイナーシング看護協会が開設して10年という節目にあたります。これまでを振り返りこれからを考える機会として記念号を発刊致しました。どのような状態の方でも地域でよりよい療養生活が過ごせることをめざして、手探りながら、介護と看護が協働したケア内容や体制作りを工夫してきました。安心して楽しく過ごしていただき“笑顔になれる”ことに努め、重度の方も参加していただけるように工夫したレクリエーションや季節行事も定着してきました。療養通所介護を利用することで、状態が不安定な方や初めての重介護で不安に思っておられる方が、「意欲が増し体調も安定した」「最期まで通い自宅で過ごすことができた」「10年以上安定して生活ができています」等々のお声を届けて頂いております。今年、療養室が手狭になり、利用のご希望も多くなったため増築もいたしました。

今後は、地域の方々にも開かれた場となり役に立てる通所介護として、また、利用者やご家族の方がよりよい療養生活が続けられるように、多職種の方々と連携をとり、お一人おひとりにそったケアをしていきたいと思っております。今後ともご支援、ご指導よろしくお願ひいたします。

### 編集後記

「ダイナーシング 10年のあゆみ」を編集させて頂き、10年という月日の中で療養通所介護は、在宅医療を支える一つの要であることを再認識することができました。

全国的に伸び悩んでいるサービスではありますが、今までご利用いただいた利用者様やその家族、関係機関の方々に感謝しつつ、さらに10年、そしてその先まで、在宅医療を受ける方々の支えとなる事業所であり続ける必要を感じました。

岡山ダイナーシング看護協会  
職員一同

